

Title	物価史の研究について
Sub Title	
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.10 (1956. 10) ,p.756(68)- 760(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19561001-0068
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001-0068">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001-0068</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

た。また「他の歴史家は人口・資本蓄積・工業化・労働移動・企業家の型・貯蓄の誘因及び経済成長の他の構成要素の研究……に忙しく立ち働いた」。「中世史家は傾向の研究……へ向つた」。「研究の大部分が今日目差しているのはこういつた問題について」であつたと教授は結んでゐる。

三

「経済史の研究は今や全速で前進しつつある」。経済史が到着した発展の現段階はボスタン教授によつて以上の如く概観された。一部で過大評價されるマルクス史家の襟頭を教授は経済史の目覚ましい発展を外部から支えるものとするが、決して発展の本筋とは考えなかつた。むしろ経済史の発展は内部的な力の発展により促進されたのであり、経済学の理論的問題に對する経済史家の接近、また経済學者の経済史の領域への進出こそ経済史発展の現段階を特徴づける重大な事項であつたとした。経済史と経済理論の交流のうちに教授は経済史発展の現段階の大きな特徴を見出そうとしたのであつた。従つてこの段階では経済史と一般史との距離はいよいよ大となつて行く。歴史學の一分科としての経済史ではなく、経済史は經濟學の一分科であるという線がますます明白なものとなつて來た。もはや「経済史家は問題を歴史上の通俗的な事件や人物から選ばないで、社會科學の假説から選ぶ」。例えば中世史家は「農業の總生産量と新しい土地の生産性との關係」。「物價の動きに對する地金の供給の影響と人口の動きの影響」。「工業發展において演ずる技術變化の役割」を、また近世史家は「人口の長期の動きに對する出生率と

つた。

従つてここではさういつた問題について考へて見た。物價史の效用といつた問題で、物價史研究の動向についてではない。後の問題に關しては別に觸れる機会もあるであらう。

二

物價史の研究では實際に支拂われた價格と賃銀のみが問題となる。しかし政治的・宗教的な壓迫の下で支拂われたことが明瞭な價格と賃銀の記述は除外される。

従つて物價史の利用により貨幣の購買力判定ということが可能となる。近世の初頭では貨幣の價值變動が激しい。貴金屬の産出の革命的増加でまた戦争による信用膨脹で貨幣の購買力が極端な低下を示す場合が屢々であつた。他方貴金屬の産出の相對的減少でまた戦後の信用收縮で貨幣の購買力が上昇を示す場合も起つた。この事態は多くの論者の關心を呼んだ。そして例えば一七六四年にギアン・リナルド・カルリは、メキシコ銀の流入の増大が價格に及ぼした影響を確定するため、最初の指數の一つを考案した（「Del valore e della proporzione de'metalli monetati」, Pietro Custodi, *Scrittori classici italiani di economia politica*, Parte moderna, XIII, 335-54）。またジェボンズは十九世紀中葉におけるカリフォルニア、オーストラリアの金坑の發見によつて起つた價格の高騰を測定するため指數を案出した（「A Serious Fall in the Value of Gold Ascertained and Its Social Effects Set Forth」, 1863, 15-47）。エッチワースが指數の作成を思い立つた

書評及び紹介

死亡率の……影響」。「産業革命の必要條件としての農民的土地保有者の消滅に關するマルクス史家の假設の正當性」。「資本の供給に對する利率の影響」。「工業發展の種々な局面における企業家の行動」。「賃銀の……刺戟に對する労働者の對應」といつた問題を選んだ。そして教授はこういつた動きのなかに経済史と經濟理論の交流という経済史發展の現段階の大きな特徴が窺い知れるとした。

(渡邊 國廣)

物價史の研究について

勘定簿に記載の價格と賃銀は今日に傳わる最古の客觀的な史料である。経済史家はこの貴重な史料を無視しなかつた。多くの経済史家が物價史に關心を寄せた。トウィック、ダヴェネル、ロジャーズは生涯の最も生産的な時期を物價史の完成に當てた。また今世紀に入つて物價史家としてイギリスではヴィヴァリッチ、ドイツではエルザス、オランダではボストユムス、オーストリアではブルブラム、ポーランドではヴェヤク、アメリカではベザンソン、コールが特に著名であつた。今後とも経済史家は物價史の研究に向うであらう。度重なる戦亂で破壊されたといえヨーロッパの各地に残存する多くの未開の勘定簿は経済史家の關心を惹くに違いない。それだけに物價史の利用により何が得られるかは考へねばならぬ重大な問題であ

主要な動機は、一八七三年から一八九六年にわたる不況期の物價暴落であつた（「Measurement of Change in Value of Money」, reprinted in *Paper Relating to Political Economy* 1925, I, 195ff.）。この期の暴落は、アメリカとドイツにおける銀貨の廢止・急速な技術變化・人口増加・新領土の擴大によつて金の産出が物價を維持するには不十分な程になつたという事情に起因した。

しかし最上の指數によつても貨幣購買力の變化を完全に測定することは困難であつた。時代の發展と共に新しい生産物が紹介され、舊い生産物に取つて代つた。近世に入つては特に激しく、そしてこのことがまた、長期にわたつて妥當する指數の作成を困難にしていた。従つて或る指數が貨幣の購買力の變化の程度を正確に示し得るためには、その作成に當つて精々五十年という短期間を對象とすべきこと、また需要の型や生産條件を異にする多くの基本的な生産物の價格、消費者により直接に使用される労働の賃銀を基礎とすべきことが注意されなければならないであらう。

しかし價格と賃銀についての指數なしには貨幣の購買力に起つた大體の變化すら把握することが出来ない。指數に通じないミスは見たままの事實から、價格の下落で労働階級の地位が向上したと考へた（「An Inquiry into the Nature and the Causes of Wealth of Nations」, Cannon ed., 192-200）。しかし『國富論』が書かれた當時において價格の上昇は激しく、十六・七世紀の價格革命の時期に劣らない程であつた。

一七九七年から一八二一年にわたる正貨支拂の停止期に起つた英蘭銀行をめぐる論争では貨幣の購買力を測定しておくことがリカー

ドーにとつて重要な筈であつた。しかし物價水準の測定が「明白に不可能である」と信じてリカードは貨幣の購買力について考へようとしなかつた(“Proposals for an Economical and Secure Currency” 3rd ed. 1819, 15)。そして紙幣の價値を論ずるに際し、戦争による影響で混乱の多い阿姆斯特ダムの爲替相場や金の市場價格によつた。地金論争に加はるることによつて貨幣理論を豊かにした如何なる論者も貨幣の購買力を測定しようとしなかつた(Of. J. Viner, “Studies in the Theory of International Trade” 1937, 126—27)。英國銀行の支拂停止期によつて、指數により價格の變動を示し、また大藏省や英國銀行の政策の分析を行なつたのはシルバリングが最初であつた(“British Prices and Business Cycles, 1779—1850”, *Review of Economic Statistics* 1923, V, 223—51, “Financial and Monetary Policy of Great Britain during the Napoleonic Wars”, *Quarterly Journal of Economics*, 1923—1924, XXXVIII, 214—33, 397—439)。

十九世紀の中葉に金坑の發見で物價は上昇した。上昇の事實は認めても、原因を金坑の發見に求めず、反論のための材料を集める論者があつた(Rubus S. Tucker, “The Myth of 1849.”)。また物價の上昇を過少評價した論者があつた。他方價格の上昇を過大評價して、慘憺たる通貨膨脹を避けるため金本位制の破棄を政府に迫る論者もあつた(“R. S. Sayers, “The Question of Standard in the Eighteen-Fifties”, *Economic History*, 1930—33, II, 575—601)。僅かにシェボンズのみがこの状態について適確な判断を示し、且つ上昇の程度にまで言及しているが、これは全く指數

についての豊富な知識のためであつた(Jevons, “A Serious Fall”, 65—7)。

III

物價史の研究は貨幣理論の樹立に役立つ。十九世紀の中葉以來の時期について利用し得られる價格と金産出の斷片的な記録は貨幣理論確證のための十分な基礎となり得た。

例えばカッセルは、一八五〇年から一九一〇年までの大ブリテンにおける卸賣價格の指數を金の産出増加と比較することによつて貨幣の數量的理論への確信を深めた。そして、貨幣と交換される生産物の増加と釣合つたためには、また従つて價格の安定を維持するためには、金の年産三パーセントの増加が必要であつたと論じた(“The Theory of Social Economy” 1923, II, 438—58)。またカッセルは一九一四年から一九二〇年にかけてのスウェーデン銀行による紙幣の増發に起因する貨幣數量の増加とスウェーデンの卸賣價格の指數の上昇の間に存する相關關係を指摘することによつて、貨幣の數量的理論を再確認して(“Money and Foreign Exchange after 1914” 1922, 38—51)。

價格が通貨の量によつて決定されるとするカッセルの主張は物價史の側から大きな支持を受けた。しかし他の場所、他の時代の物價の動きは必ずしもこの説の成立を許さなかつた。例えばエルザスは、ドイツの若干の都市において人口が價格革命期に増加して(“Price Data from Munich”, *Economic History*, 1934—37,

III, 76—83)。人口の増加は消費の増大を意味し、物價の上昇に連なる

とするのがエルザスの論理であつた。然りとすれば、中世末の黒死病期、一七五〇年以來の主要な戦亂期における人口と物價の逆の動きをエルザスは如何に説明する積りなのであろうか。

四

物價の動向を知ることによつて金融政策についての評價が可能となる。金融政策の最高目的は完全雇用の實現によつて生産を最大にすること、社會的生産物の平等な分配を容易にすること、契約者間の社會正義を促進することにあつた。これら諸目的を達成するためには物價の高騰を抑制し或いは物價の崩壊を阻止する必要がある。従つて價格と賃銀に關する一連の史料により明らかとなつた貨幣購買力の變化は、信用し得る統計の利用し得ない時期について金融政策の目的が達し得られた限界を示す。

金本位制の反對者は金本位國における悲惨な物價の變動を強調し、一八二六年から一八四八年と一八七三年から一八九六年の暴落、一八四九年から一八七三年と一八九七年から一九一四年の暴騰、一九二九年以降の暴落を指摘した。一方擁護者は金本位制がジョン・ロー計畫の下で起つたような激的な通貨膨脹を阻止したと論じた。紙幣禮讀者は獨立戦争に先立つ五十年間における中部植民地における價格の安定を指摘し、また一九三二年の大ブリテン、スウェーデンにおける紙幣採用が破局的な通貨缺乏に終止を打ち、第二次大戰の勃發まで安定せる物價を持続せしめたと主張した。立場を異にする論者によつて打出された二様の見解は物價史の知識によつてその

正否の判定を下されるに違いない。

五

物價史の成果を利用することによつて經濟史における通説が往々にして覆えされる。例えばジョン・ロー計畫についての多くの研究ではミンシッピー事件がパリを除く如何なる地方に對しても何ら經濟的影響を持たなかつたと考えられた。しかしボルドー、ツールーズ、マルセイユにおける價格と賃銀に關する一連の史料は、これら地方で價格がパリと同程度に高騰して(“E. J. Hamilton, “Prices and Wages at Paris under John Law’s System”, *Quarterly Journal of Economics*, 1936—37, LI, “Prices and Wages in Southern France under John Law’s System”, *Economic History*, 1934—37, III)”。また一般には一六〇九年以來のムーア人の追放がスペイン經濟衰退の主要原因と看做された。しかし價格に關する史料は葡萄酒をも含めムーア人の生産物がその追放により何ら影響のなかつたことを示す。賃銀についての史料はムーア人が多く居住した場所での追放後に上昇した如何なる證據も示さない。これら事實から推し、追放されたムーア人は非常に少數で、通説の如く、衰退原因の第一にムーア人追放を置くことは甚だしく危険といわざるを得ない。經濟の全體に影響する程の勞働力の減少が起つたとすれば、それは一五九九年と一六四八年の二回スペインを襲つた疾病が原因であつた(E. J. Hamilton, “The Decline of Spain”, *Economic History Review*, 1937—38, VIII)。

六

價格と賃銀に関する記述に多くの經濟學者が關心を向けた。そして物價史研究の今日の盛況を迎えることが出来た。物價史について知識を缺くことが史家の判斷を如何に誤らせて来たか、また物價史の知識が經濟理論の構成に際し如何に重要であつたかについては上述の如くであつた。

しかし物價史研究の意義は以上で盡くされない。價格と賃銀に関する記述は、もし同時に技術發展・市場關係に関する記録が利用し得られるならば、種々な生産者の經濟狀態の測定に役立つ。また物價史の研究を通じ生産地と消費地における主要商品の價格の變化を比較することによつて、輸送機關發展の程度を推測することが可能となる。更に或るものの價格の推移を長期にわたり辿ることがよつて、そのものの生産性の變化を確認することが可能であつた。例えばヴィヴァリッチは、大ブリテンにおける鋼鐵の生産性が累死病以

來約五十倍になつてゐること、小麥生産についても事情は同じであることを確認した("Prices and Wages in England from the Twelfth to the Nineteenth Century", 1939, p. xxvi)。それはアッシャーにおいても見られる如く、利用し得られる断片的な價格の記録から技術進歩の程度を評價しようとする態度であつた("The Industrial History of England", 1920, pp. 310-13)。經濟史研究の方向が少なくとも西ヨーロッパでは數字による理解の方向へ進んでゐる今日、我々の關心の如何に拘わらず、物價史について理解を持つことは必要であつた。しかも「規模・完全性・科學的正確度においてこれまで書かれたすべての歴史研究に優る物價史」の出現すら豫想されてゐる以上(E. J. Hamilton, "Use and Misuse of Price History", *Tastes of Economic History* 1944, IV, 47)、經濟史家の物價史への關心は益々深められるべきであらう。(渡邊 國廣)

經濟學關係文獻目錄

(昭和三十一年六月・七月刊)

理論・學說史・經濟思想

- \* 社會科學入門 みすず書房編集部編 現代科學叢書 B 6 三八五頁 二八〇圓(みすず書房)
- \* 經濟學原理 大野信三著 A 5 六七〇頁 七八〇圓(千倉書房)
- \* 經濟學教科書 2 増補改訂版 ソ同盟科學院經濟學研究所 マルクス・レーニン主義研究所譯 合同新書 B 40 五四二頁 一二〇圓(合同出版社)
- \* ケインズ批判 B・C・ウォロロディン著 森弘太郎譯 B 6 二〇七頁 二〇〇圓(日月社)
- \* 經濟學原理 氣賀健三著 A 5 二九二頁 三〇〇圓(慶應通信)
- \* 價格論——理論經濟學の基礎——伊藤久秋著 A 5 三一二頁 四一〇圓(有斐閣)
- \* 經濟學說全集 5 歴史學派の形成と展開 大河内一男編 A 5 三一三頁 三四〇圓

經濟學關係文獻目錄

- (河出書房)
  - \* 經濟表 フランスワ・ケネー著 坂田太郎譯 B 6 四二三頁 六五〇圓(春秋社)
  - \* マルクス經濟學辭典 豊田四郎編 青木文庫 A 6 三三二頁 一五〇圓(青木書店)
  - \* 經濟通論 全訂版 堀江保藏編 A 5 三四三頁 四五〇圓(有信堂)
  - \* 經濟學と辨證法 黒田寛一著 B 6 二五七頁 二五〇圓(人生社)
- 統計
  - \* 統計學の對象と方法——ソヴェト統計學論争の紹介と検討——有澤廣巳編 B 6 二六〇頁 二八〇圓(日本評論新社)
  - \* 標本調査法 津村善郎著 B 6 小 二一五頁 二二〇圓(岩波書店)
- 財政・金融・保險・證券
  - \* 印度支那貨幣制度の研究 アンドレ・トウーセー著 松岡孝兒譯 A 5 三八八頁 七八〇圓(有斐閣)
  - \* 株式市場——株の秘密を探る——竹下盛行編 B 40 二一六頁 一三〇圓(新評論社)
  - \* 現代の金融政策 講座金融 2 山口茂
- 商工業・經營・會計
  - \* 現代經營會計講座 1 形態・財務篇 木村和三郎・古林喜樂・佐々木吉郎・中村常次郎・馬場克三監修(東洋經濟新報社)
  - \* 現代經營會計講座 2 經營勞務篇 木村和三郎・佐々木吉郎・古林喜樂・中村常次郎・馬場克三監修 A 5 三三一頁 三八〇圓(東洋經濟新報社)
  - \* 昭和財政史 9 通貨・物價 大藏省昭和財政史編集室編 A 5 五〇七頁 一三〇圓(東洋經濟新報社)
- 沖中恒幸編 A 5 一九六頁 二五〇圓(春秋社)
  - \* 圖說日本の財政 大藏省大臣官房調査課編 B 6 三六四頁 二四〇圓(東洋經濟新報社)
  - \* 會計學概論 紺野俊雄著 A 5 三八九頁 四五〇圓(邦光書房)
  - \* 動的貸借對照表論 十一版 シュマーレンバッハ著 土岐政藏編 A 5 二六五頁 三五〇圓(森山書店)
  - \* 原價計算事典 横濱市立大學會計研究室編 B 6 小 四四七頁 四〇〇圓(同文館)
  - \* 講座信用理論體系 4 學說篇 信用理論研究會著 A 5 三五九頁 五〇〇圓(日本評論新社)
  - \* 昭和財政史 9 通貨・物價 大藏省昭和財政史編集室編 A 5 五〇七頁 一三〇圓(東洋經濟新報社)
- 現代經營會計講座 1 形態・財務篇 木村和三郎・古林喜樂・佐々木吉郎・中村常次郎・馬場克三監修(東洋經濟新報社)
- 現代經營會計講座 2 經營勞務篇 木村和三郎・佐々木吉郎・古林喜樂・中村常次郎・馬場克三監修 A 5 三三一頁 三八〇圓(東洋經濟新報社)